

令和5年度 第1回
松本市・山形村・朝日村中学校組合
総合教育会議議事録

松本市・山形村・朝日村中学校組合教育委員会

令和5年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議

令和5年12月25日（月）

午後3時開会

松本市役所 第一応接室

議 事 日 程

1 開会

2 あいさつ

3 懇談項目

学校に来づらい子どもたちの支援を考える

- (1) 宮内かつら先生から不登校支援に関するお話
- (2) 鉢盛中学校における本年度の取組み
- (3) 意見交換

4 閉会

出席者名簿

【会議構成員】

管理者（松本市長）	臥 雲 義 尚
教育長（松本市教育長）	伊佐治 裕 子
教育長職務代理者（朝日村教育長）	百 瀬 司 郎
教育委員（山形村教育長）	根 橋 範 男
教育委員（朝日村教育長職務代理）	中 村 八重美
教育委員（保護者代表（今井地区））	村 山 晴 美

【発表者】

鉢盛中学校長	中 川 満 英
長野県発達障がい情報・支援センター副センター長	宮 内 かつら

【アドバイザー】

信州大学教職支援センター准教授（松本市教育顧問）	荒 井 英治郎
--------------------------	---------

【事務局職員】

事務局長	逸 見 和 行
事務局次長	坂 口 俊 樹
事務局次長	小 西 え み
事務局次長	清 沢 卓 子
事務局指導主事	関 誠一郎
事務局次長補佐	伏 見 宏 美
事務局次長補佐	降 籬 基
事務局主事	藤 澤 駿 輝
山形村教育委員会	藤 澤 洋 史
朝日村教育委員会	上 條 靖 尚

◎懇談項目

- 事務局長（逸見和行） 定刻となりましたので、ただいまから令和5年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議を開催いたします。

議事に入りますまでの間、私、事務局長の逸見和行が本日の進行を務めさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

なお、本日の会議は公開とし、お手元の次第により進行させていただきます。

また、本日お話を伺いする予定の宮内かつら先生でございますが、所要によりまして遅れてくるとお聞きしておりますので、お見えになったところでお話を伺いしたいと思えます。あらかじめご了承ください。

それでは最初に、この会議を主催いたします臥雲管理者からご挨拶をお願いいたします。

- 管理者（臥雲義尚） 年末のお忙しい中、教育長をはじめ教育委員の皆様、そして、信州大学の荒井准教授にはご出席をいただき感謝を申し上げます。そして、日頃から当中学校組合の教育行政全般にわたりまして大変なご尽力をいただいておりますことに重ねて感謝を申し上げます。

本日は、「学校に来づらい子どもたちの支援を考える」をテーマとしまして、宮内かつら副センター長からは専門家の視点から不登校支援に関するお話を伺います。また、中川学校長からは令和5年度の不登校支援の取組みについて、地域との関わりや相談支援体制の成果と効果といった関連を中心にご説明をいただきます。その後、皆さんから意見交換という運びとなっております。今日の会議で、課題やあるべき姿を共有して、相互の連携を進めていくことにつなげていければと思っております。

教育の在り方は、ここへ来て国レベルでも、また、長野県、松本市のレベルでも探究的な学び、課題解決、また学びということに大きくかじを切るという状況になっております。これまでの決まっている答えを、できるだけ早く正確に出すということのみでは、これからの子どもたちが先行き不透明な社会を生き抜く力を身につけることが難しいということが根本にございます。長らく続けてきた教育の在り方が変わろうとしているこの局面におきましては、今日のテーマといたします不登校、そうした問題がより表面化をし、しっかりと取り組まなければいけないということでもあろうかと思っております。

ぜひとも今日は自由闊達な意見交換を通じまして、新たな学びの環境をどう整えていくかということに皆様からのご意見をいただければと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

- 事務局長（逸見和行） それでは、続きまして、伊佐治教育長からご挨拶をお願いいたします。
- 教育長（伊佐治裕子） 皆さん、こんにちは。ただいま臥雲管理者からもご挨拶がありまし

たけれども、私は教育委員会を代表して一言ご挨拶申し上げます。

本日のテーマは、「学校に来づらい子どもたちの支援を考える」ということで、皆さんご承知のとおり、不登校児童・生徒の増加というのが今、教育界では一番の心配事になっているのではないかと思います。そのような中、鉢盛中学校では令和4年度から、以前は校内中間教室と呼んでいました教育支援センター、相談室をスタイルを変えて取り組んできたということ、それからもう一つは、授業の中にグループワークトレーニングという研修を取り入れてきたということがあります。これは令和4年度から臥雲管理者に提案をいただき、予算を認めていただいて、そして、鉢盛中学校にはこの2つの柱に力を入れて、先生方に取り組んでいただいております。このことが、今年の全国学力テストの質問調査で「生徒の皆さんに学びはどんなですか」というような内容でお尋ねする質問があるのですが、この中でみんなと一緒に協働的な学びをすることが楽しいというふうに答えた子どもたちの割合が松本市内の中学校よりも大分高い、そして、長野県、全国の割合からも大分高いということがありまして、とても嬉しく思いました。

そのほかにも、鉢盛中学校では、中川校長先生のリーダーシップの下、例えば、校則を生徒会が中心になって見直しをしたり、それから、制服を標準服という、一定のスタイルは決めて、それぞれのアイテムは自分で選んでもいいよというような、子どもたちが柔軟な選び方選択をできるというスタイルに変えています。そんな取組みをしていただいたおかげで、子どもたちも学校内のいろんな姿が少し変わってきたなというようなことを中川校長先生からお聞きをして、それもとても嬉しく思っていることです。

今日は、そんなことも校長先生からご紹介いただけと思うのですが、宮内先生がおいでになるまで校長先生からお話を伺って、みんなで意見交換をしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局長（逸見和行） それでは、これより議事に入ります。

まず、本題に入る前に、前方の画面をご覧ください。お手元には紙で同じ資料をお配りしてございますので、どちらかをご覧くださいと思います。

こちらの資料は、病気や不登校、その他の事由により長期欠席されている生徒の鉢盛中学校と松本市内全中学校との在籍比、これを比較したものでございます。令和元年度まではそれほど大差はありませんけれども、令和2年度の新型コロナウイルス感染症の流行期以降、鉢盛中学校においては長期欠席者の数が増えていることが分かります。しかし、令和4年度から支援体制の見直しやグループワークトレーニングなどの取組みによりまして、市内中学校との差が改善されてきていることが分かるかと思っております。今回は、この取組み状況等も踏まえまして、中川校長先生からご報告をいただければと思います。

それでは、先ほども申し上げましたが、宮内先生は後ほどお越しになったところでお話をお伺いするということといたしまして、先に鉢盛中学校における本年度の取組みについて、こちらを中川校長先生からご説明をお願いいたします。

それでは、よろしく願いいたします。

○学校長（中川満英） 中学校校長の中川です。本日はよろしく願いいたします。

それでは、資料の15ページのほうをお開きいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

学校に来づらい子どもたちの支援を考えるということで資料を作成させていただきました。

令和4年度の不登校児童・生徒数につきましては、そこに記載させていただいているとおりであります。その傾向であります。今増えているというところ、本校も同様であるというところを表1のほうに全校生徒数の中の長期欠席生徒数、そして不登校生徒数ということで作成させていただきました。なお、令和5年度のほうは11月30日現在の値であります。

このように増加傾向はありますが、一方で表2をご覧いただきたいと思います。前年度に比べ、20日以上欠席生徒数は減少傾向にあるというところが見えてきました。これは県のほうに提出させていただいている書類でも、この12月初旬のものは20日以上欠席生徒数で比較というものはありましたので、このような資料にさせていただきました。これは令和4年度から行っているグループワークを取り入れた授業づくりや仲間づくり、また、校内相談室等、ステップルーム等の学びの場の選択肢を増やしたことが要因だと考えております。

現在、不登校については登校という結果のみを目標とするのではなく、児童・生徒が自ら進路を主体的に捉えて社会的に自立することを目指すとの考えであります。やはり未来を担う生徒の成長を考えたとき、学びが継続されないことは様々な点から憂慮されるというふうに私としては感じております。そこで、どのような学校の在り方や支援が生徒たちが生き生きと学校生活を送ることにつながるかを、本年度の取組みや生徒の実態から考えたいと思いました。

まず、生徒アンケートです。過日、1学年で学校において楽しいと感じるとき、楽しくないと感じるときはどんなときというアンケートを取りました。それが点線の中にあるものであります。楽しいと感じるとき、また、(2)は楽しくないと感じるときであります。ポイントとしては、やはり生徒というのは他との関わりが楽しいか楽しくないかというところのポイントになっているということが浮かび上がってきました。

その中で本年度の取組みであります。まず、(1)番の学級や縦割りでの仲間との関わりということで、先ほどご紹介いただきましたグループワークトレーニングの中でも、その遊びの要素を取り入れた鉢Pタイムという時間を、本年度は水曜日の放課後に毎週実施してきました。また、関わる場を位置づけた授業づくり、また、一昨年度から朝の読書の中でも、読書はただ静かに読むということだけではなく、定期的に子どもたちが自分の考えを仲間に伝え合う、アウトプット読書というものを取り組んできております。そういう中で、生徒の笑顔や意欲的な学びの場面が多く見られています。

(2)番として、地域との関わりであります。地域をキーワードにした1学年、2学年、3学年の学習を実施してきました。また、本年度は3市村の方々から地域ボランティアの応

募をいただいたものを積極的に生徒に伝え、参加者が28名と急増しました。子どもたちはとてもいい表情をしておりまして、いずれの活動も地域の方々の支援をいただくことで意欲的な姿が見られております。

(3)番として、不登校傾向生徒や特別支援学級生の部活動参加であります。現在、本校の不登校生徒傾向の中でも、部活動が登校意欲となっている生徒は8名おり、休日練習や大会等にも参加できております。また、特別支援学級在籍生徒31名のうち、そこにあるような内訳で運動部に11名、文化部に8名が入部しており、通常学級生と共に熱心に活動に取り組んでいます。この背景には、顧問が生徒の特性や状況を把握しつつ、本当によさを引き出し、伸ばすという意識で周囲の生徒とインクルーシブ的な指導を実践していることがあるというふうに感じております。この特別支援学級の生徒の中には、先日の北信越駅伝のバトンリレーのところに写っていた生徒もそうですけれども、本当にいい姿が見られているなというふうに感じております。

続きまして、4番ですが、相談支援体制の整備です。昨年度より、ほっとルーム、ステップルーム等をこの中学校組合で予算化いただきました生徒相談員を加え、自立支援員、適応支援コーディネーター等で力を合わせ、本年度はさらに定期的に地域に出向き生徒支援を行う出張相談室を設けております。そこにも数人の生徒が参加できております。そういう中で生徒が安心して学校生活を送れていると思っております。また、生徒の心の内面、心の状況をつかむアセスの実施、分析研修等も行ってきました。

そういう中で、課題と今後へ向けてであります。グラフ1にありますように、学級での話合いや互いの意見のよさを生かした活動が増えていると、そういう中で意見のよさを、そういう質問事項に対して、非常に当てはまる、どちらかといえば当てはまると答える生徒が増えております。これらの生徒は学級に心理的安全性が高い場であると感じている生徒が増えていることを表しており、安心して学習や活動に取り組むことで子どもたちの持つ資質、能力の育成につながると考えております。よって、今後もグループワークを取り入れた活動を充実させることで、生徒一人一人の居場所があり、他との関わりのよさを感じられる学校づくりに取り組んでいきたいと思っております。

一方、先ほども申しあげましたように、1年生のアンケートからは、他との関わりに苦手意識を持つ生徒の状況も見えてきます。また、不登校傾向生徒で部活動に参加できている先ほどの生徒のことも申しあげましたが、そういう生徒にどうして部活動には参加できているのかなと聞くと、部活動というのは目標がはっきりしているということに参加の理由にしている生徒が多いです。こういうことから、生徒にとって学習や活動の目標を理解していることの重要性が分かります。今後は、これまで以上に単元の狙いや評価のポイントを事前に示すとともに、その到達に向けた活動では他との関わりを、その生徒の状況を把握しつつ段階的に増やすなど、生徒が学び方や活動の場を選択できる、そういう体制の構築に取り組んでいきたいと思っております。

生徒が主人公の学校づくりを考えたとき、生徒の実態に応じて学校の在り方が変化することは必須と感じております。思春期の多様な生徒たちが未来の地域を担う中心となることを認識し、教職員と共に柔軟性のある学校づくりに取り組んでいきたいと思っています。

私からは以上でございます。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。今、中川校長先生から鉢盛中学校の取組みということでお話しをいただきました。

学校での取組みで20日以上欠席者数が減少しているということ、その中で、具体的な取組みといたしまして、他との関わりという部分では鉢Pタイム、それから、地域との関わりということでボランティアの皆さんのお力をいただいているということ。それから、部活動への参加ということでは、特別支援学級在籍の生徒31名中19名が入って活動しているということ、相談体制としては、出張相談室、あるいはアセスの実施、こういったことに力を入れて取り組んできたということのお話がありました。あとは、課題と今後へ向けてということの中では、こういった学級での話合いや意見交換のよさを生かした活動が増えている、グループワークを取り入れた活動を充実させることという、そんなお話がございました。

一方では、他との関わりに苦手意識を持つ児童・生徒もいるということで、その中では特に目標を理解していく、こういったことが重要だということが分かったというようなお話がございました。こういった学校での状況を踏まえまして、ご意見がある方はお願いしたいと思います。

最初に、百瀬職務代理から最初に一言、よろしく申し上げます。

○教育長職務代理者（百瀬司郎） 今、校長先生からお話を聞いて、今の子どもたちが置かれている状況というのが非常に端的に表れているのが今の時期かなというふうに思います。特に、やはりコロナ以前とコロナを経たからの子どもの様子が、がらっと変わってきている現状があります。今お話にありましたように、鉢盛中学校さんではステップルームとほっとルーム、さらに、出張相談室という取組みをしながら地道に子どもの居場所、あるいは学びの場所づくりを進めてきている、それがこの数字のように成果が表れているという現状があります。しかし、その反面、今、他との関わりに苦手意識を持つ子どもが増えている。これ実は、私どもは小学校を管轄しているのですが、小学校の子どもたちは全く同じことが言える状況にあります。特に低学年、1年、2年、3年の子どもたちが非常に自分の置き場所というかそれに悩んでいる、結局自分の我を通しちゃったり、相手を受け入れられなかったりして、結局トラブルが多発していくという、そういう状況が見られます。ですから、子どもたちが今置かれている状況というのは、コロナが明けて、自分が他とどうやって関係をつくったらいいか分からないというような迷いの時期というのですか、そういう時期にあるのではないかというふうに思います。

そういう中で、鉢盛中学校のこの取組みの中にグループワークトレーニング、友達とどう関わっていくのがいいのかというトレーニングを重ねています。本当だったら小学校のとき

にやってきているはずのことなのだけれども、そういう他との関係づくりというのを学び直していく部分というのは、やっぱり今の子どもたちには必要なことだなということを今感じさせていただいたところでもあります。小学校も全く同じ状況が表れているということは言えるかと思います。

感想ですが以上です。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。

今、朝日村の小学校の状況ということで、他との関わりについては、苦手意識が小学校も同様であるというお話がございました。これについてどうでしょうか。

根橋教育委員さん、山形村の状況等をお願いいたします。

○教育委員（根橋範男） 山形小学校なのですけれども、コロナ前とコロナ後で大きく変わっています。不登校の人数で申し上げますと、令和元年度のときには不登校児童数は4人でした。在籍率では0.83%です。それが令和2年度、コロナが始まると5人、あまり変わらなかったのですが、在籍率は1.08、それがコロナの真っ最中の令和3年度は7人になりました。令和4年度は11人、令和5年度は10月末で8人という状況です。在籍率も国や県の平均よりもかなり高い不登校率になっています。

特徴的なのは、以前は高学年が30日以上の不登校になっていたのですけれども、ここ令和4年、5年は1年生も長期欠席で不登校になっているということになっています。これは先程、朝日の百瀬教育長さんが言ったように居場所がなかなかないということと、それから、兄弟関係でお兄ちゃんお姉ちゃんが不登校や不登校傾向であると、どうしても1年生とか低学年であっても同じようにその傾向になってしまっているというのが今の状況です。そこでどうするかということですが、山形小学校におきましては平成24年から校内の中に、名称がのびのび教室という当時は校内中間教室、教育支援センター的なものを設置をして、不登校傾向の子でなかなか教室に入りづらい児童の居場所として、ちょっとほっとできる場所を確保して、完全に不登校になる前に何とか早期対応ということでやってきました。現在も続けていますし、ある程度効果はあるのかなと思っています。現在、そののびのび教室に通っている児童数は10人います。やっぱり居場所がないというのが子どもたちにとって、学校生活で安心できる場所がどこかというのが教室ではなかなか厳しいものがあって、学習と生活の中間みたいな場所が多分居心地がいいのだろうなと思っています。

あと、不登校だった子が村の中に子どもたちの居場所になる、そういった事業を今年から行っておりますけれども、その中で現在不登校の子がそこに居場所を見つけて、今、少し学校に足が向き始めているということで、居場所となる場所で安心して生活体験ができたり、学習支援を受けられたりすると、また学校という社会の中に、学校生活の中に戻っていける、そういうエネルギーがたまるとかなという感じはしています。

山形小学校の状況は以上でございます。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。今、山形村は居場所がなかなかないという、

それから、コロナの期間で大分増えてきているというようなお話がございました。そのような中で安心できる場所、学習と生活の間になっているという、そういった居場所があるといいかなというようなお話もございました。こういったご意見がございましたが、ほかの委員の皆様はこれに関連して何かございますでしょうか。

中村委員さん、いかがでしょうか。

○教育委員（中村八重美） コロナの関係では、小学生が3年から4年間、運動が十分できていなかった、1日の流れの中で自由に遊ぶ。体を動かして遊ぶ時間が60分ぐらい必要の年齢のときになかなかそれが十分できていなかったかなというのを実感しているところなのですが、朝日小学校でも運動面でちょっと低下しているというような話題もございまして、マラソンを始めたり、少しずつそんな動きが出ているかなと感じています。

それから、鉢盛中学のほうでは、朝日村のほうでもそうなのですが、出張相談所朝日分校という形で、1月、2月、3月、毎週木曜日に放課後児童クラブのわくわく館をご利用してくださって、子どもと関わってくださるというようなお話もあって、頑張ってくださいているなど感じているところです。

それと、先日校長先生のほうからもお話を伺った中で私がすごく嬉しかったことは、読解力について国語の先生たちがすごく力を入れてくださっていて、読書はもちろん大事なのですが、その読書をそれぞれクラスの中で発表を行い、どんなふう感じているのか、どんなところを受け止めたのかということをやっているというお話を伺ったときに、それがとても大事なことで、学力につながっていくということを実感させていただきました。鉢盛中学にも本当に気持ちよく伺うことができ、また行ってみたいなどいう気持ちにさせてくださっているところです。そんなことを感じております。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。今、コロナで運動ができなかったということと、あるいは出張相談所で利用して関わっていること、それから、読書の関係で読解力について発表の機会があったというお話をいただきました。ありがとうございます。

それでは、保護者の立場で村山委員、お気づきの点等がございましたらお願いいたします。

○教育委員（村山晴美） 保護者の立場からということで、実際に今、子どもが鉢盛中学に通学をしています。出身の地区は、鉢盛の中でも一番人数の少ない松本市今井地区からということで、コロナ禍で子どもたちの関係や保護者と学校との関係も希薄になり、もう本当に希薄中の希薄になっている中、鉢盛中学に入学するという年代の1、2、3年生が今在籍しているのだと思っています。

そんな中で、学校が楽しい場所であったり、自分の居場所であったりというふうを感じる場づくりということで、学校のほうで校長先生を中心にいろんなことを考えていただいているというのは、前回の議会の中でいただいている内容でもそうですし、今日のこの話でも改めてということでありがたいといったところがあります。

それに比べて保護者と学校の関係というのは、希薄さを取り戻すというような状況にはな

かなかなってないんじゃないかなというふうに感じています。今、上の子は3年生ですが、今年の白峰祭ですとか、文化祭を子どもたちがやっている姿を初めて目にしました。残念ながら自分の子どもは出席できなかったのですが、学校に行ってほかの生徒さんたちが自分のやってきた活動を一生懸命発表するという姿を目の当たりにすることができ、コロナ禍ではそういった機会が、オンラインとかの手法を取っていただいたのですけれども、やっぱりじかの自分の五感で見るということは大切な機会かなというふうに感じています。学校と子どもの関係といったところもありますけれども、学校と保護者と子どもという三角形、そこに地域というものが加わるというのは、ここからも欠かせないものだというふうに思っています。この組合立ということを考えても、3市村ということでも大事なことだと思っています。

今、ふと思い出したのですが、コロナ禍だったときに、子どもたちが学習の場だったり、子どもたち同士での関わり合いがなかなか持ちづらいといったときに、夏休みの期間は地域の改善センターを開放してくださっていて、いろんな感染対策は取りながら、コロナ禍であっても子どもたちはそこに来て、学習していいよという場をつくっていただいていたという記憶があります。その時に年上の皆さんが来ていただいて学習を教え合ってくださいようなこともあって、地域とのつくり方がすごく大切だなと感じました。それもあって、全ての子どもたちが平等にというか、満遍なくというのは難しいのかもしれないのですけれども、そういったありがたい場があるよということが分かり、もっと浸透していけば、よりよい関係になっていくのではないかなというふうには感じています。学校がそういった場所になっていくことがよりいいのかなというふうに思っています。

あと、一言だけ、拝見した資料の中で、表2なのですけれども、令和4年と5年の20日以上欠席の生徒数の比較ということで、これ4年から5年になると自動的に学年も1つ上がるというふうに私は理解したのですけれども、令和4年に2学年だった子どもたちが20人いるのですが、令和5年度には15人で減っているのですけれども、1学年は8名だったのが14名になっています。そういったところが何か取り組んでいただいているのだけれども、ある学年には有効的だったり、そうじゃなかったりというようなことが、もしかして子どもたちの特性やその学年の人数の特性とかで何かあったりするのかなんて少し感じたところがありました。また、そういったところも見えていただいていると思うのですが、そのところもまた保護者の立場からとしてはまた注視していただけるとありがたいかなというふうに感じました。

以上です。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。今、学校、保護者、生徒という関係に加えて、地域との関わりということもご意見としていただき、居場所があるということが大事だということのお話をいただきました。

その中で、資料の中で、学年によって差があるのではというお話がありましたが、中川校長先生、何かその辺でコメント等はございますでしょうか。

○学校長（中川満英） 生徒の状況は個々によってみんな違いますので、本当にこれがそのまま正直な数値というくらいしか言いようがないのですけれども、学年が上がることによって、たくさんのいろんな取組みはしてきましたけれども、子どもたちの発達状況に応じてというのが現在のところですよ。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。ここまでのお話で教育長、ご意見を願います。

○教育長（伊佐治裕子） 私のほうから申し上げたいのは、先ほど朝日村、それから、山形村の小学生の状況ということでお話がありましたが、松本市も小学校、中学校とも不登校の在籍率は上がって、右肩上がりですと上がっているのですが、どちらかという小学校のほう、令和3年度から4年度にかけては右肩上がりの角度が小学校のほうが上がっているというのがちょっと気になるところです。

それから、ここ二、三年ですけれども、国の統計調査を見ても、学校内での暴力行為ということが、高校生は若干減って、中学生は横ばいなのに、小学生が5年くらい前と比べると2倍くらいに増えているということで、小学校の幼い子どもたちに何が起きているのだろうかというようなことを私もずっと気になっておりました。

先ほど学校と生活、学習と生活の間くらい居場所の居心地がいいのかなという話がありましたが、自分たちの子どもの頃を考えれば、学校でも好き放題伸び伸びやっていたし、家でも伸び伸びやっていたなと思います。私がこども部にいたときに、児童館、児童センターの先生たちから聞いた話としては、学校でも家でも子どもたちは窮屈でいて、放課後の居場所である児童館、児童センターの放課後の授業に来て子どもたちが弾けている、好き放題やって、物凄い状態になっているということをよく聞きましたけれども、子どもたちにとって放課後でほっとする場所があるというのはとてもいいことなのですけれども、本来だったら学校で、それから家庭で伸び伸びと過ごせるということが幼い子どもたちにとっては必要なことなのだろうなということを改めて感じています。ただ、家庭の状況を見ると、とにかく共働き家庭の急激な増加ということで、お父さんお母さんが遅く帰って来るという状況の中で、なかなか昔の私たちの子どもの頃の状況というのは望むべくもなく、だったらやはり学校が伸び伸びできる、そういう環境に変えていかなくてはいけないんじゃないかということも改めて感じているということです。

以上です。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。松本の状況と、それから、子どもたちのほっとする居場所が今の社会状況は共働きの世帯が多いということの中で、学校がそういう場所になっていたらというような話がありました。

市長、少しご意見等があればお願いいたします。

○管理者（臥雲義尚） 私は、学校の問題は社会全体の問題と関連して少し見解を述べたいと思います。もともとかつてのような地域や家族で子どもを包容力を持って育てるということ

がだんだん難しくなっていた、その状況の中にコロナが来たということだとすれば、それまでうまくいっていたものがコロナによってうまくいかなかったというよりも、それまでいろんな問題点が抱えられていたものが表面化した、あるいは程度が非常に甚だしくなったというのが日本における教育、あるいは社会全体を取り巻く状況の令和2年度のビフォーアフターではないかなと思っています。

その令和2年度のコロナによって助長されたことは何かというと、一言で言うとソーシャルディスタンス、社会的距離を取れと言いました。あるいは取らざるを得なかった、感染症防止のためにはマスクをし、そして、人との距離を1メートル、2メートル間隔を取りなさいと、こういうことを我々大人も、そして子どもたちにも言わば強制をするという2年間が続きましたので、このソーシャルディスタンスを取らざるを得ない社会において、子どもたちが人と人との関わりを希薄になるということはある意味必然だったですし、それがいい方向に必ずしもいかないことも分かっていたと思います。今、そこからどう回復するか、あるいはもともとの状況を超えたようなプラスの状況をつくるということが私たちに問われているし、それが一番凝縮した形で出ると、こういう問題に向き合っていかなければいけないかなということで取り組んでいただいていると思います。

ポストソーシャルディスタンスという言葉も、ちょっと自分なりに今お話を聞きながら思いました。元に戻ればいいということでは多分ないと、あまりにも濃密な人間関係は、それそのものが息苦しいと感じる地域社会である、あるいは学校管理というのもあったのだと思いますので、適度な距離感、あるいは多様な距離感、そういうものが社会全体にも、あるいは子どもや学校にも求められていて、それがこの先ほどからの、例えば部活だったら行けるけれども授業はなあとか、子どもたちのそれぞれの適度な距離感というものが学校においても、家庭においてもあって、先ほどの学校でも家庭でもないところにこそ適度な安定感を感じるということも子どもたちによってはあるのだということを感じました。

ですので、家庭においても学校においても第3の居場所においても、どこかにはこの適度な距離感を子どもたちが感じられる場所を私たちは提供をできるようにしていかなければいけないのかなと、そういうことによって、それがかつては学校であるべきだということが強かったわけではありますが、今は私たちは学校であることは望ましいけれども、学校でなくてもいいよということで、多様な距離感を持てる環境づくりをできるだけきめ細かにやっていくということが今、大きな柱としては過ごせるのではないかなと思いました。

その上で、鉢盛中学校というものの組合立の特殊性といいますか、これも先ほどの冒頭のグラフで、コロナによって上昇カーブがほかの松本市全体でも大きいということは、ソーシャルディスタンスの影響が大きく出たということになると思います。それまでそこまで顔見知りでない子どもたちが中学進学と同時にソーシャルディスタンスを取りなさいというところで新しい環境に身を置く、その結果、不適応な状況になる割合が大きくなったということはかなり必然性があることかなと思います。それを克服しようということで、様々な取組み

を校長先生が中心にやっただいて、実はそれこそが先ほどから申し上げた適度な距離感とか多様な距離感を、小学校段階でそれぞれのルーツが違って子どもたちがそれで次の中学生段階でうまく適応できるということがヒントとしていろんなことを見いだせば、それが今度は松本市全体の小・中学校の子どもたちにとっての適度な距離感、多様な距離感を私たちがどうやって提供していくかの大きなヒント、あるいは参考モデルになれるのではないかなと思います。だからこそ、この今日のテーマもそうしたことでもちろんこの鉢盛中学に関係する皆さんにとって意味あることですが、もっと広く松本市全体にとっても意味のあることにつながられるのではないかなと感じております。

以上でございます。

- 事務局長（逸見和行） ありがとうございます。今、管理者からは、ポストソーシャルディスタンスということで、適度な距離感をという、そういう方向が求められるということの中で、この鉢盛の取組み、これが広い意味で松本市も含めての参考モデルとなるのではないかなというそういうことをお話していきたいと、そういったものがありました。

この後、荒井先生、お話をお願いいたします。

- 信州大学教職支援センター准教授（荒井英治郎） 信州大学の荒井でございます。

2点ほど、コメントさせていただきます。

1点目は、資料の15ページの表2についてです。令和5年度の1学年の20日以上欠席者数に7人という記載がありますが、この数は朝日村や山形村の小学校に在籍していた子どものうち、小学校段階から不登校または不登校傾向であった子どもが、中学校進学後も継続してこの数字として表れているという理解でよろしいでしょうか。それともこの7名は中学校進学後に、という数字なのでしょうか。差し支えない範囲で、実情を教えてください。

2つ目は、鉢盛中学校の取組みに対する反応についてです。今回は様々な取組みをご紹介いただきましたが、鉢盛中学校の教職員の皆様や不登校のお子さんを持つ、あるいは持たない保護者の方々による、学校の取組みに対する反応があればお聞かせいただきたいです。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。ただいまの件について、中川先生、お願いします。

- 学校長（中川満英） よろしく申し上げます。令和5年度の1年生、今年度140名の7名は、小学校でそうでなかった新たな子たちも出てきていますが、逆に小学校のときには不登校生徒だった子たちが非常に頑張っている生活しています。先日も小中連絡会で小学校6年のときの担任の先生と校長先生も来られましたけれども、どうしてあの子はこんなに元気にやっているかというようなことを言われている生徒もいたり、そういうところで個々に違うというところで7名というところになってきています。

次に、新しい取組み等につきましては、例えば鉢Pタイム等は、生徒からの先日も学校評価は非常にとても学級でいろいろな活動ができてありがたいというようなこと、また、アウ

トット読書は昨年度から行っていますけれども、子どもたちからの非常に深く本を読むようになったとか、そういうことを考えてやるようになったとか、そういうのが非常に高い数字になっていたの、今年度も継続して進めているというところであります。

保護者の方からは、学校評価を行っていますけれども、たくさんの厳しいご意見はいただいています、このことについてはないということでございます。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。ここまでのところで何かご意見はございますでしょうか。よろしいでしょうか。

そうしましたら、宮内先生がお越しですので、ここで先生からお話をいただいて、この後また意見交換とさせていただければと思いますので、宮内先生、よろしく願いいたします。

○長野県発達障がい情報・支援センター副センター長（宮内かつら） すみません、遅くなりました。せっかく皆さんから事前にいろいろ準備のご連絡をいただいていたのに大変申し訳ありませんでした。何か話を蒸し返すような形になったら大変申し訳ないですし、最初のほうはお話を伺えなかったの、ちょっとズれるようなことがあったら申し訳ないかなというふうに思います。私も初めてこの会議に呼んでいただきましたので、長野県発達障がい情報・支援センターについて、詳しくはここに載せさせていただきました。QRコードから入っていただくとセンターの紹介がありますので、今日はセンターの紹介のほうはゆっくりできませんが、自己紹介ということで昨年度3月まで松本養護学校で教育相談を担当しておりました。それぞれの小学校さん、鉢盛中学校さんも、教育相談ということで10年来学校のほうへ出向かせていただきまして、それぞれのお子さんの教育相談をさせていただきました。鉢盛中学校さんにつきましては、不登校の関係で本当にゆっくり長く関わらせていただくことで、関わらせていただいたお子さんたちがそれぞれ自分で自分の歩みを進めていくというようなことを一緒に経験させていただいております。それから、今井小学校、朝日小学校、山形小学校につきましては、保育園の頃からお子さんを見させていただいております、本当に長く子どもたちの成長を見させていただく中で、今日思っていることをお話しさせていただこうかなと思います。

不登校に関しては、不登校といえますか、学校に来づらいお子さんたちの考え方はいろいろあるのですよ。例えば、登校を促したほうがいいのか、そのまま来ないほうがいいのか、割と曲解してお伝えされることもあるかなと思いますが、私は特別支援教育をずっとやってきましたので、特別支援教育のところを基本として教育相談もしてきております。何かといいますと、できているところからできていくということです。これは先ほど市長さんもお話しいただきましたけれども、社会的な考え方としても、ここへ戻っていくというか、こういう基本的な考え方になるともうちょっと社会全体が緩やかに、多様性とか適度なというふうにおっしゃったのはどんなところからかなというふうに考えたときに、できていることを大事にしていて、できていることがさくさくできるようにするというのが特別支援教育の基本だなというふうに思っているのです。不登校に関する考え方はいろんな考え方があるので、

保護者さんや当事者の方がこれがいいなという考え方に結びつけられればそれでいいと思っています。どの考え方が正解ということではないかなと思っています。

私の場合は、不登校は、学校へ行かないことは問題だということではなく、学校へ行きたくないとか、学校へ行きづらいという状態として捉えたときにどうかというふうに、感情を度外視して状態をどうやって改善しようかというふうに考えるとどうかなというふうになっています。

例えばですけれども、今日もいろんな資料の中にお子さんの声も入っていましたが、例えば何かきっかけになるような問題が解決したからといって学校に行けるわけではないのです。いじめがあったとか、授業が分からないとか、問題は問題としてそのきっかけはあるのですけれども、いじめが解決した、仲良ししたね、ごめんねごめんねしたね、じゃいいねということではなく、その友達とのトラブルが解決しても、何かしら学校に対する恐怖ですとか、もうそこで行きたくないなと一瞬思ってしまった何かが残っていて、重い状態が残るというふうなことはあるかなと思うんです。だから、どうやって問題を解決しようか、どうやって仲直りしようか、仲直りしたじゃないかというそこにみんながこだわっていってしまうと、何か傷をえぐるようなことがずっとずっと続いていってしまって、なので、問題として取り扱うのだけれども、今ここから始めていくという未来思考型へ持っていくということがすごく大事だろうというふうに思っています。

もう一つですけれども、不登校を複雑にしている背景は、これはお子さんや保護者さん両方に関わらせていただいてつくづく思うんですけれども、子どもが学校へ行きたくないと言ったときって、もう症状とすると末期なんですよ。もういよいよとなっても無理ですお母さんみたいな、もう無理なんですけれどもねというふうにして行きたくないよと言うのですけれども、大人は、保護者だけではなく先生たちもそうですけれども、不登校が始まったと思うんですよ。もうここで重度というか、状態の重度さがずれているんですよ。子どもの悩みは、さっき言ったみたいにお勉強が分からないとか、それからお友達が嫌だとか、先生が怖いとか、だるいとか、何かそういうふうに子どもの悩みと、親はそれはそれで共感するのだけれども、学校へ行けなくなっちゃったらどうしようとか、このまま大人になれなかったらどうしようみたいに、ここに悩みのずれというか、問題のずれがあるということもずっとあるのですけれども、だから、子どもの気持ちを置き去りにして大人がやいやいするという、そういうことがずっとずっと起こるなと思います。

これは、とても古いものの考え方ですけれども、やっぱり時代が変わって、世の中が変わっても、人が人である以上、変わらないものはあるなと思っています。このマズローさんという方の欲求5段階というところでは、まずは生理的・身体的欲求というところで体がしっかりしていなければ何もできませんよねということですね。そうすると、お子さんたちはこんな症状のことを訴えてくるよという視点です。

子どもの不調とか不快に共感するということが大事で、おなかが痛いとか、頭が痛いとか、

何かあそこがかゆいとか、いろんなことを言うてくるのです。だから、何かしら不調があるんだらうなということ共感すると、誰しもそうですけれども、健康第一じゃなければ何もできないというところだと思えます。ここを無理して、おなか痛い、頭痛いと言っているのに学校へ行けとかと言っちゃうものだから、どんどん重篤化していくという、子どもが体のことを訴えているときは私、命がけで訴えていると思えますよ。もう熱が出たら学校へ行かなくていいでしょうと、もうそこまでしてまで学校へ行きたくないということ言っているというところに共感するということだと思えますよ。

生理的・身体的欲求のところを満たされていけば、自然にどこかにみんな関わろうという基本ができていくのですが、その関わる場が安心・安全な場でなかったら、せっかく体が元気になりました、行った先で何かが起こるということが分かっちゃったら、そうしたらそこは行かないと思えますよ。もうこれは私たちがコロナの時代に全員が経験したことじゃないかと思えます。人混みに行ったらうつるかもとか、何か危ないところに行かないんだとか、これはもうみんなここを経験しましたよねというところじゃないかなと思えますよ。校内が安心できる場であったり、人であったり、時間とか事柄というそういう調整ができていけば、体さえ元気だったら学校へ行くと思えますよ。子どもたちは学校へ行きたくないと言いながら、結構学校は行かなければいけないと思っていたりとか思うから苦しいのだと思えますよ。もう一切学校へ行かなくていいですよという人たちは結構元気に家にいるという、この前元気な不登校を鉢盛でも合わせていただきましたけれども、うちで結構元気だぞという、いいですよということ。

家庭も、お家の方たちにはお話するのですけれども、学校へ行かなくても家庭の中で脅かさないでほしいということをお願いするのです。学校へ行けだとか、勉強しろだとか、そんなことをしていたらどうなるんだみたいなことを言って、おうちの中で脅かされると、その下の身体的欲求のところを傷つけていくしかないということだと思えますよ。

私たちは社会的な動物なので、やっぱりそういうことが満たされていけば、誰かにつながりたい、集団化したいという欲求を持っています。だから、集団で学校へ来なくてもオンラインの中でお友達をつくっていたりとか、それが今風な、もしかしたら集団化なのかもしれないけれども、何かつながりたいといいますね。それから、一人でちっとも学校へ来ない子どもで友達が欲しいとかいいますね、学校へ行けばと言うと、そこは違ふとかいって、じゃ誰だったらいいんだみたいなことを一緒に考えますけれども、そういうことを一つずつ子どもたちと話をしていくことが大事なんだらうなというふうに思います。

このときには、主体的に始めている行動は何だらうかというようなことを見るといいと思えますよ。まだこの人たちはおうちにいることが多いですけれども、自分で起きてくるんだとか、それから、ご飯だけは食べるんだとか、お風呂には入るんだとか、結構衛生面が崩れてくるとちょっと危険だなというふうに私は思っています。だから、お風呂に入るとか、ご飯を食べるとか、何かそのぐらいのことでも自分でできていけばいいなということと、一

緒にいるから大丈夫だよということをどこで担保するのかなということです。

そこが満たされていくと、やっぱり認められたいとか、自分を分かってほしいというふうに、自分のことを存在価値を見せつけていくとか、そういうことをしたくなるわけなので、ありがとうねと、役に立っているよということだったり、一緒にやるよ、やってみようというふうなことがメッセージとして伝わっていくといいかなと思います。そうすると、人は自分の力を社会的に働きかけしていこうというふうに思うものじゃないかなというふうに思います。こんな感じかなというふうに思って、いつもこのどの段階にいるのかなということを担当の先生や保護者の方と共有するわけです。やっとやっと寝るだ、食べるだと言うようなことができている人に学校へ行って勉強しろなんて、こんな例えばセルフエスティームとか、自己実現のところをいきなり持っていこうと思ってもそれは無理だから、今できていることから少しずつやっていけばいいねということです。

不登校の支援が本当に様々なのは、背景を探るだけでもこれだけあるということなのですよ。本人の状態としてもこんなことがざざっと考えられますし、それから、周りの背景というのは先ほど家庭環境というようなお話もありましたし、社会的な環境というようなこともありますし、本人以外のところでもすごく変化が大きくて、どこから派生しているかというようなことを組み合わせて考えると、もう本当に一人一人全部違うので、メニューをみんな考えていかなくちゃいけないというところだと思うんです。

長野県の発達障がい情報・支援センターということで、今年新しく開所しましたけれども、11月末のところでは165件、ほぼほぼ電話相談のところですよ。たまに来所するのですがほとんど成人で、当事者だったり、保護者だったり、ご家族だったり、それから、会社の方たちだったりというようなことです。1割に満たないところで幼児の保護者ですとか、保育園児の祖母、おじいちゃんおばあちゃん、大抵ばあちゃんなのですけれども、相談がありますけれども、先ほどもちょっとお話がありましたけれども、これは架空事例ですけれども、こんな相談は結構ありますということで確認しましたけれども、お子さんたち、小さいお子さんたちもコロナ期で人と関わるみたいなことが制限された中で今学校生活へ戻ってきていますけれども、女性でも男性でもそうなのですが、20代前半の方たちのご相談が結構続きました。大学を卒業して就職したのだけれども人間関係がうまくいかないというようなこと、職場の人に発達障害じゃないのあなたというふうに言われてそうでしょうかと、検査したいですが病院はどこですかみたいな、そういうことです。こういう方たち、支援センターは外へつながることが仕事ですので、いろいろ聞き取りをしていくのですけれども、こういう方たちは小学校や中学校のときに不適應や集団不適應を起こしています。重い人もいれば、時間的に短いような方たちもいましたけれども、意外に高校はちょこっとうまくいったんだなんていう人たちもいます。高校はある種、中学校に比べると、例えば商業科へ行くとかカテゴリーが決まってくるので、もしかしたらうまくいく場合もあるかもしれません。これ大学は、また荒井先生にも伺ったらいいと思いますけれども、この方たちのお気の毒なところは大学時代

がほぼぼりモートなんです。いわゆる社会的な高等教育以外の高等社会学を勉強しないまま大学卒業生ということで就職して、人間関係とか、社会的なことを勉強しないまま大卒として扱われて、うまくいかないというようなことで悩んでいらっしゃる方たちが今年が多いということを保健師さんたちからも伺いました。だから、コロナのこの影響はいろいろなところからあるだろうなと思います。

このケースの課題みたいなどころでは、発達障害というようなことが一人歩きしているということもあるかなと思います。発達障害の方が必ずしも不登校になるわけではありませんけれども、社会的な不適應は起こしやすいというふうには思うので、1つ目の背景要因にはなるかなというふうに思います。発達障害じゃないのあなたというふうに言われたときに、やった一発達障害だとはあまり思わないですよ。障害という言葉のイメージだと思いますけれども、共生社会だとか多様性を認めるのだから言いつつ、あなたは発達障害というふうに分ける意識というか、それが社会全体的にあるところの苦しきというか、それは子どもたちも同じではないかなというふうに思います。検査とか、病院とかといってもなかなか成人は難しいよということです。

生活全体を整えようということを考えていったときに、学力と社会性は比例しないと思っています。学力はもちろん学校なので、学習というようなことはすごく大事に考えなければいけませんけれども、中学生、高校生というふうになれば上がるほどこの社会性というところを見落としがちになっちゃうのだと思うんですよ、身辺自立どうかなとか、コミュニケーションどうかなとか、公共性というのはみんなと仲よくしていくのにどうかなみたいなことなのだと思います。あと、情動のコントロール、自分の気持ちのコントロールです。割と小さいうちには激しくばんばん飛び歩く、人をたたきだみたいなのが話題になりますけれども、大人になって情動のコントロールが苦しいのは、落ち込んで上がってこれない人たちとか、人を巻き込まないと自分を収められない人たちが大変なんだなと思います。どんなに小さい赤ん坊でも情動を抑えるのは赤ん坊の仕事というか、その人の仕事だよということを履き違えてはいけないということを中学校の先生たちにもくれぐれもお話をします。あとは道徳性、なぜそれをするのかしないのかの理屈の部分ですよ、人をたたいたり駄目、駄目と言うけれども、何でたたいたりいけないのかということをちゃんと教えてくれないと分からない人は分からないだろうなということです。あと、体力・健康ということですが、やっぱり一番下のところは自己肯定感、いろいろ凸凹あってもうまくいかなくても自分は自分でいいよ、君は君でいいよという、それを自分のこととして捉えていくということです。

特別支援教育の中には自立活動というものがあって、この6項目があるのです。この中には人が人として生きていくためのことがたくさん書いてありまして、これを積み上げていきましょうねというようなことです。生活機能というところでも同じようにこんな項目があるわけですが、よく自己理解をしたいとか、学校の先生たちは自己理解してもらいたい

ということを使うのですけれども、では自己理解とは何かというところで、自己理解イコール障害受容ではない、君は発達障害だよとか、君は自閉症だよということが自己理解ということではなくて、どのぐらいの環境調整があれば、どのぐらいの条件があれば自分のパフォーマンスを最大限に発揮できるのかということを知っているということが自己理解なのだろうと思います。

それから、自分のこととして捉えられるということで、不登校なんかもそうですけれども、親がとか、先生が困るぞ困るぞ、おまえ困るぞと言っていても本人は全然困っていないみたいなことはしょっちゅうあって、自分のこととしてどう捉えているのかということです。あとは、よく保育園とか小学校とか、困ったときに困ったと言えるようにするというのを目標を立てるのですけれども、センターは困った人しか電話かけてこないのですが、「困った」という言葉を使って相談してくる人はいないのですよ。困った人は大体ぶーぶー文句を言っているか、ぎゃーぎゃー騒いでいるか、困ったまま、ちんとして泣いているかというそういうことです。だから、何かお困りですかと聞くと困っているかなと言いますね。だから、あなた困っているねということをフィードバックしてもらえるとということが大事で、学校は困らないように環境を整えるということがすごく大事だろうなと思っています。

話を聞いてもらう経験の少なさを常々感じます。小さいお子さんを抱えたお母さんが、うちの子は本を読まないのですけれどもどうしたらいいですかと、センターへ電話しないで隣のばあちゃんに聞いてくれという感じですけども、そういうようなことまで全部聞けないとか、しゃべれないというようなことで、こんなことを聞いたら変に思われるかなみたいな、そういう社会風潮かもしれません。あなたはあなたのままでいいよということを、他者からオールオーケー出してもらうということが学校の役目だろうなと思うんです。君いいね、それでいいよというふうに言ってもらおうということです。ただ、これを言っていくと、私は私のままでいいのだからと、何かちょっと履き違えて、例えば社会的なルールとか、人の迷惑を顧みず私は私だみたいなことを言っちゃうけれども、それもまたちょっと違う、最低のルールを守りながら人と一緒にやっていくと、その人というのが大勢ではなくてもいいと思うんです。大勢とできる人もいるし、二、三人が限界という人もいます。なんかそういう自分の環境調整ということを考えられるといいかなというふうに思います。

キーワードは、先ほども村山さんの言葉にもあったような気がしますけれども、孤立しない、孤立させないということだと思います。一人で困らないようにして、子どもも大人もですけれども、それから、特別支援教育をやってきたからというわけではないですけども、全ての子どもが自立活動をしたらいいと私は思っています。特別支援の人たちがやるべきではなく、先ほどの自立活動の項目はやっぱり社会へ出て行って大事なことです。自立活動という視点があったらいいなと思いますけれども、中学校はそんなことをやっている暇がないので、そんなことはと言うかもしれませんが、ぜひここは着目してもらえたらいいなと思います。

鉢盛中学校さんにも本当に10年来通わせていただいていますけれども、校長先生にもお話ししましたが、今年の4月、子どもがうんと変わったと思いました。皆さんもそうだと思うんですけども、学校へ入った瞬間の空気感みたいなってありますよね。鉢盛中学校の玄関へ入って、廊下を通過して、少し行ったところで相談室があったので、どうぞこちらへと通されちゃったのですけれども、本当にそこを50歩ぐらい歩く中で、子どもたちが変わったと校長先生にお話ししました。変わったのはなぜかということは校長先生がお話くださったのだと思うのですけれども、多分ですが、子どもが話を聞いてもらっている、先生たちが話を聞いているのだと思います。

私もこうなってくると妄想の世界だなと自分で思っているのですけれども、先ほどからもお話がありましたが、結構不登校の子どもたちでも自分の存在は学校の中にあたりして、1回も学校に行っていないのに俺は3年何組だみたいなことを言っていて、「え？」みたいなことを思ったりもするのですけれども、学校以外のところがいい人もいるけれども、学校の中にいろんな場所がある。特別支援学級だけではなく、鉢盛中学校さんも工夫されて、それが功を奏していると思いますけれども、週末行った小学校でもそんな話がありましたけれども、学校の中にスタバができましたと言っていました。特別支援学級の入り口のところに自由空間があり、偶然できちゃったのですけれども、そうすると通常学級の子がちょっとふらっと行って、その子はいずれ入級するのだと思うのですけれども、ふらっと行って、休んで、スタバに行ってきたかのように帰ってきて、帰ってきたと言ってまた授業に入るという話をしていました。中学校の中にスタバをつくれればいいんじゃないかなと思います。コーヒーを出さなくてもいいのですけれども、ちょっとはみ出しちゃったから、すぐ支援学級だとか、すぐはみ出しちゃったから何だとかということではなく、さっきの5段階の欲求に合わせて、1つクラスをつくれたからいいということでもなく、本当にそこでゆっくり寝たい子もいれば、少し休んだら勉強したい子もいたりして、いろんなバリエーションのあるものを提供できるというところで、学校の中にも外にも、いろんなバリエーションがなければ、例えば学校に行きづらいからフリースクールをつくれたといっても、そのフリースクールが1つの形でしかなかったら、きっとそこからあふれる子たちが出るだろうなと思います。いかにバリエーションをつくれるかというところでは、人と空間というところでもかなりの労力やお金が要るだろうなと思うので、ほぼほぼ妄想なのですが、学校の中にちょっとそうやって休める場所が幾つかあれば、少なくとも不登校ではなくなるかなというそんなことを思っていて、ぜひこの会議で鉢盛中学校さんの、別にスタバじゃなくてもいいのですけれども、いろんな休み場所とか、いろんな居場所があるんだよというふうなことが実現するといいなということでお話しさせていただきました。ありがとうございました。

○事務局長（逸見和行）　ありがとうございました。

不登校について、できることから、今できていることを大切にという、不登校の問題というよりは状態だと思います。その状態から未来志向でということで、いろんな段階がある

んだよ、その段階に応じた柔軟性が必要だということになります。学校の中にいろんな居場所がある方がいいんだよとそういうお話がございました。

時間が大分短くなってきましたけれども、それぞれの委員の皆さん、ご意見等があれば簡単にお願ひできればと思いますけれども、いかがでしょうか。

百瀬先生、お願いします。

○教育長職務代理者（百瀬司郎） 宮内先生、ありがとうございました。

今お話を聞いて確信をしたというか、そんな思いもあるのです、その辺のところをちょっとお話をさせていただきます。先ほど私が一番先に話したことは、他との関わりを苦手としている子どもたちが増えている。それで、その後に山形村さんも松本市さんも小学校の特に低学年の子どもたちが危ないんだと、要するに、人との関わりをその期間にやるべき関わりをしてこなかった子どもたちがふらついちゃっている、そういう状態がやっぱり朝日村でも見えている。それが今の子どもたちの置かれている状況で、いつどういう状況が起こるか分からないというような、そんな不安定さも抱えながらやっている。それがそのままいきますと不安定感がやっぱり中学校につながっていくというようなことになると思います。そうになると、今の小学校の教育をどう子どもたちの安定した居場所を居心地のいい場所にするかということがこれから求められてくることになるかなど。そうなりますと、今お話を伺ったように子どもにとって困らない環境を整えるのが小学校だというお話を宮内先生にお話しいただきました。

私が今ずっと課題に思っているのは、いろんな表れのある子どもたちの多様性という問題なのですが、昔のような表れというのは割と分かりやすかったけれども、今はもう本当に複雑で、一人一人が全く違う様相を見せてくるのが今の不登校の状態だということを思います。また、トラブルもみんなそんなのですが、その多様性に対応できるいろんな学校の要素というのをいかにつくるか。でも、それには人が必要ですし、場所も必要ですし、いろんな要素が絡まってきて、そうすると一人一人の多様性やニーズに合わせた環境というのがいかにできるかどうかというのが非常に今、私にとっては課題なんです。しかし、やはり今、鉢盛中さんがやっている、基本的にはまず居場所、ここなら安心していられるという場所。そして、もう一つはちょっと勉強が役立ってきたなということに対して対応できていく、やっぱりこの2つのコントロールと、そういう状態の場所がどうしても必要になるかなど、そんなふうに今は思っています。

それと、クラスの中で、これは本当に小学校で必要なのですけれども、友達との関わり方をどうトレーニングしていくか、これは絶対やらなければいけないかなど、そんなふうに実感しているところであります。子どもたちの関わりというのが一番根っこに、このコロナの中で一番おろそかになった場所、それをいかに培ってあげるかということが今後は大事になるかなど、そんなことを考えたところであります。

以上であります。

- 事務局長（逸見和行） ありがとうございます。ほかの委員の皆さんはいかがでしょう。
- 教育委員（根橋範男） 宮内先生、ありがとうございました。

親の悩みなのですけれども、割と不登校が対象の児童・生徒に対しては、支援しようという心持ちだったり、手厚く何か対応をとることができると思うんですけれども、その保護者の悩みというのはどう悩み事を緩和したり、保護者の困っていることを聞き入れて、うまく保護者も不登校にしっかりと対峙していくとか、そういうのはどうやってつくってあげればいいのでしょうか。それを何か先行事例みたいところで、こうしたら効果的だったというようなことがあれば教えていただければと思いますけれども。

- 事務局長（逸見和行） 宮内先生、お願いします。

- 長野県発達障がい情報・支援センター副センター長（宮内かつら） さっき子どもの背景みたいなものがすごく多様性があるということでしたけれども、保護者もやっぱり同じくいろんな背景を持っているので必ずしもこうということもないのですが、やっぱりその保護者の生きてきた、そういう背景も見ながら、保護者が置かれている環境も取り、いかに気長に伴走するかということだと思うんですよ。1つの不登校のポイントは中3だと思っていて、どこから不登校が始まってポイントも中3だと思っています。というのは、子どもが自分のこととして進路を決めるタイミングがやっぱりそこにどうしても来るんですよ。そのときに自分のこととして考えられるようにするというその長期戦を構えるので、私は不登校の相談に入るときには、おうちの方に、私は長期戦になりますけれども、それでよければ一緒に伴走しますということをお話するのです。今すぐどうにかしようとおうちの人は思うけれども、今すぐどうにもならないよというところを覚悟してもらおうとか、そういうことで一緒に伴走していくということが続けてきました。大抵2年ぐらい泣けば、3年目ぐらいから笑っているという、そういうスタンスかなと思ったりします。おうちの方たちが少し力が抜けるとか、諦めるとか、さっき子どもとの距離感みたいなこともありましたけれども、子どもと自分というものを分けて考えられるようになると、子どもがちゃんと自分で歩き出すんですよ。私たちは学校の教育をしてきた、私もそういう身ですので、いかに子どもが自立していくかということが最終目的かなと思っていますから、やっぱり親子共々と言いながら自分事として子どもが自分のこととして考えられるようにという、その軸を外さないということだと思います。なかなかそれを学校の先生だけではやり切れないと思います。やっぱり子どもの支援と親の支援というところを分けて、だからチームでやるという、学校内もそうですけれども、学校内外のチーム支援というところが有効なのだろうなというふうに思います。学校は下手すると1年で担任が替わっちゃうし、どうしたってどこかで切れ目が出てきますから、地域の中で細く長く関わられる人というところが必要になるケースも多々あります。私も一番長い子は10年付き合っていて、この間もお母さんと、やっぱり問題も新しく出てきますけれども、本当にその子なりの成長はゆっくり見えているということはありますから、そのぐらいの覚悟で付き合える人たち、途中でリレーしてもいいと思います

けれども、長期戦を構えるよという、そういうことかなと思います。答えにはならないのですが、すみません。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。

ほかの委員の皆さん、ご意見がございましたらお願いします。

教育長、お願いします。

○教育長（伊佐治裕子） 今回の宮内先生のお話を伺って、私がこども部時代に感じたことと重なるなと思いました。やっぱり就学前に子育て家庭を包括的に地域で支援できること、よくネウボラという名前と呼ばれますけれども、今、市長が各地域づくりセンターに保健師の配置をというようなことを提唱して少しずつ進んでいます。本当は地域の中にいつでも体のこととか、心のこととかを相談できる保健師がまず身近にいて、そこでまずいつでも行けば相談に乗ってもらえるという、そういうことができれば、教育分野だけでないところで、地域の包括的な支援とかをすればいいなということを感じていました。

そして、最近、学校の先生からいろんなトラブルのケースが来て、聞くと、子ども同士がけんかをしますよね、そうすると、そこに子ども同士で一定程度やっぱり折り合いをつけて解決をする力というのが、小学校3年生、4年生くらいだと思ってくると思うんですが、そこにもうトラブルが起きると親が出て行って、親同士のけんかになるというケースが結構あります。坂口事務局次長はいつも連絡を受けているのですけれども。それを見ていると、子どもが本当は傷ついたりしながら自分で解決していく、友達同士で解決していくということを、親がその自立する力を奪ってしまっているのではないかなということも感じます。

コロナでここまで来ましたが、人と距離を置きなさいとかということが、余計に子どもの人と関わって自分で解決する力をそいでしまっているのは確かにあったのかなということを感じました。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。ほかの委員の皆さんはどうでしょうか。

○教育委員（中村八重美） お話を伺っていて、いろんな角度からいろんな施策や方法があるのだなということを受け止めることができました。ありがとうございます。

今、教育長先生がおっしゃったように、幼児期というか、低年齢の学年の子たちが本当にけんかをしたときに、こんなことは言葉で言えば分かることなのに、すぐキレるというのか、問題を大きくしちゃったりとか、騒ぎになっちゃったりする傾向があります。今は割と本当に小さいときから集団生活、例えば保育園に預けて親が就労することはもちろん大事なのですが、そこに十分満たしてあげなければいけない年齢のときに親の愛情を十分受け入れてもらえなくて、それが例えば愛情障害というか、愛着障害というか、そういうものにもつながっていくのかなと思ってみたい。それから、昔から本当に誰もが知っている三つ子の魂百までという言葉のとおり、私は3歳まではとても大事だと思っているのですが、朝日村も2歳になると80%以上の子どもさんたちが保育園に入所するような状況を見ている、なかなか心の一番無意識のうちに育てられる部分が欠けてきているのかな、昔と変わって子どもたち

が変わってきたのはそこにもあるのかな、もちろん家庭環境もあるし、環境も変わってきているのだけれども、いろんなお子さん、児童と関わっていた中で変化みたいなものはどのように捉えていらっしゃるでしょうか。

○事務局長（逸見和行） 宮内先生、お願いします。

○長野県発達障がい情報・支援センター副センター長（宮内かつら） 保健師さんとかと話をしていくともっと分かるかなと思いますけれども、感覚的な話でいけないですけれども、やっぱり人間がすごく未熟というか、私が教員になった頃の小学校1年生のイメージと今の小学校1年生は下手すると1年以上乖離しているというか、本当に発達が未熟だなということを思います。それは多分でもご家庭の問題だけではなく、そういう社会的なというか、いろんな影響を受けているのだと思います。それをお母さんたちのせいだけにはできないだろうなというふうに思うんですよ。だって、例えば働き手の問題から話をしていくと、どんな人だって働いてほしい、そのお母さん世代なんかは一番働き手として欲しいとか、だから、いろんな世の中の仕組みの中で今子どもがいて、確かに人間としてとても弱いし、未熟だなと思うけれども、そのことの原因追求をしてみても解決できる問題と、もうここまで流れてきてしまっているのもとても手がつかない問題と、ここを動かせばほかが崩れるみたいな、働けなくすればいいですよ、みんなお母さんたちがおうちにいてねというようにすればいいのかというと、そういう問題でもないです。ただ、1つは、もうちょっと世の中が寛容になって、このぐらいのことはあるよね、子どもだからけんかぐらいするじゃんと言って、仲直りできたからよかったことにしよう、明日は明日で楽しく暮らせばいいじゃんみたいな、ちょっと緩んだというか、いい意味で寛容さを持たないと、何でもかんでも完璧に子どもたちが納得するまでけんかをなんて、けんかの仲裁をしてなんて、そもそも子どもは何を言ったかすらすぐ忘れていくというような、そういうことも大人の概念で子どもの文化をいじろうとすると何かややこしいことになるなと思ったりするのです。

だから、生徒指導の問題になっちゃうのだけれども、学校も保育園も警察ではないので、事の次第を全部解決しなくてもよくて、そういうことがあったんだねと、それであした2人はどうするんですというふうに、けんかしたまま過ごすのもありだし、仲よくして暮らすのもありだしという、ちょっと未来解決的に社会が動いていく必要はあるだろうなということも思ったりします。発達障害しかりですし、さっき親の問題なのか、子の問題なのかということを整理する人たちが必要で、すごく情緒的に寄り添う人も必要だけれども、すごくクールにこの問題は終わっていますよねというように、あの先生は冷たいよねとか言われても、役割分担として、お母さんこの問題は昨日解決していますよというふうに、これはあなたの問題ですから自分で解決してくださいねぐらいの何かそういうクールな面も必要のかなということも思ったりしています。ちょっと一概に1つの原因で子どもがこうだとか、親がこうだという問題ではなく、それこそ今こういう状況をどうやって子どもたちが明るい未来へ向かうかという話に、市長さんもお話くださったように、元に戻せばいいとか、前の価値

観を何とかすればいいとか、そういうことでもないだろうなど。私は新しい価値観というか、新しい思考を生み出していくという、そういうターニングポイントだろうなというふうに思っています。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。予定した時間をちょっと過ぎてきてしまいましたが、他にご発言は。

村山委員。

○教育委員（村山晴美） ありがとうございます。このマズローの要求5段階、久しぶりに改めて見まして、そこに具体的な子どもの状態でこういうことがあり得るんじゃないかというのを示していただいてありまして、保護者の立場からも一番ちょっとどきっとしたのはこの子どもの悩みと親の悩みの段階がすごくずれているということが可能性があるよというお話がすごく胸に刺さった感じがしました。ちょっとこれを見ながら自分と子どもたちの今考えている状況が、親の目から見るとこうなっちゃう、子どもは実はこうだよといったところがもう少し見られたらいいのかなというふうに思いました。

やっぱり鉢盛中学校はみんなが自転車で通い、家から離れている場所がほとんど90%以上のお子さんたちということです。まず学校に行きづらいと思うきっかけは、家から学校に行く準備をして一歩出るといったところがまず歩いて行かれない子、自転車で行く、送っていてももらわないと行かれないとか、そんな状況があるのがまず一歩で、昇降口だったり、正門だったりいったところに一歩、校舎の敷地に入るのがまずさらに一歩、そこから教室へ行くといったときに、みんながもうそろっているときにちょっとでも遅れたら、みんなが見るだろうとかいろいろ考える。そんな中で子どもたちが学校に行きづらいというのを1つでも2つでも取り払ってあげられるような活動ということで、今日の資料に校長先生が示していただいた内容を、そんなことを踏まえながら、今後の活動がほかの松本市の中学校に比べると生徒数が少ない学校だからこそ、やりやすいところと、そうでない負のところが出やすいところがあると思います。先ほどもちょっと申し上げたのですけれども、子ども、親、学校、あと地域といったところ、本当にかっちりというか、密につながっていくことが、この組合立の中学校がより今後も子どもたちにとって存在意義のある場所になっていくのではないかなというふうに思いました。今日見せていただいた資料は、本当に心に刺さりました。ありがとうございます。

○事務局長（逸見和行） それでは、管理者、お願いいたします。

○管理者（臥雲義尚） 宮内先生、ありがとうございました。ご説明一つ一つが、そうだな、そうだなと聞くところばかりで、自分が思っていたことを言語化していただいたし、すごく勉強になりました。

その上で、実は私がそれよりももっと印象深かったのは、宮内さんの語り口といいますか、しゃべり方、これが今日は一番いいなと思って話を聞きました。それは僕もできることかな、できていくとか、今ここから始めるという部分にも通じるのですが、ちょっと無責任な

言い方になっちゃうかもしれませんが、あまり重大に受け止め過ぎないということ、そのことがみんなに安心感や前に進んでいけるよという気持ちになるなというふうに思いました。なので、ともすればやはり大変だ大変だ、不登校が増えていると我々は文字どおり問題として受け止めるのですが、状態としてということであれば、これは本当に昔より悪くなっている、すごく危機的なのかということ、本当は分からないことがたくさんあって、もしかしたらいい方向に動いている1つの兆候かもしれないかということもあるんじゃないかなど。発達障害の皆さんの状態を考えても思いますし、不登校の、今の学校に行きたがらないということは、子どもたちのほうに問題があるのか、それとも今の社会とか、今の学校とかに問題があるからこの不適應が起きているのかということからして、もし後者のほうに力点があるとすれば、それは子どもたちへのメッセージはいい社会に変えていくためのメッセージというようにも受け止められて、だからこそあまりよく分からないことが含まれているのにあまり大騒ぎしないでというか、重大に受け止め過ぎないでというのが今日の宮内先生の内容はもちろんですが、話している境遇であるとか雰囲気みたいなものにすごく伝わってきたことが、実はこの問題を私たちが受け止めていくベースにしていくものかなと思いました。

スタバをつくれればいいと、そのときのスタバって何だろうなとさっきから考えていたのですが、我々がスタバがいいなと思ったのは、1つはいろんな喫茶店とかありますけれども、干渉されないということかな、何かいい感じの無関心空間みたいなものがあるなと、それでいながら少し社会的ステータスもあって、何か自分がそこにいることが引け目を感じるというよりはちょっと前向きな感じになる。スタバというものが何か理屈っぽく言うところということかなと考えていて、そういうものがこれから子どもたちの空間になればいいと思ったり、それは寛容とか中立とか、そういうものが養われている。最後は、先生のメッセージもそうですけれども、究極は一人一人が自立して、そして生きていくということに、つながっていくということが私たちの教育としての目標となるということ、今日は様々な話を聞きながらあると思いました。ありがとうございました。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。それでは最後に。

○信州大学教職支援センター准教授（荒井英治郎） 不登校の要因は多様で、かつ支援策も多様です。ただ我々としてはやはり、管理者がおっしゃられたように社会的自立のために何ができるのかがポイントになるわけですが、この社会的自立のイメージについてもおそらく支援者間で相当なギャップがあるのだろうと推察しています。従いまして、さまざまな努力によって進められている取組みに対しても、互いに共有し続ける努力が必要だと感じました。こうした共に歩調を合わせていくためにも不登校支援のビジョンを共有していく必要があると思います。

○事務局長（逸見和行） ありがとうございます。それでは、少し時間が過ぎてしまいました。今日はそれぞれの皆さんからご意見を出していただきましてありがとうございました。

◎閉会の宣告

○事務局長（逸見和行） 以上をもちまして、本日の令和5年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議を閉会いたします。

ありがとうございました。

会議録調整職員 松本市・山形村・朝日村中学校組合 主事 藤澤 駿輝